

守殿、老中の時金銀の位惡敷仕り、吹改られ候はゞ可然と、内證申入候者有之處、一圓不聞届候儀、武野燭談に相見え候。其事と存候。

一、前田宗辰元服の作法

嗣君御元服の事、元文二年六月廿八日殿中御作法如左。

廿七日老中御連署の奉書到來、明廿八日御元服被仰付候の條、五半時兩公共に御登城有之様に申來。則其時刻御出被遊候處、於御前御書院御禮、直に御敷居の内に御着座、御一字

宗字御硯蓋に載之、御前に有之候を御老中被傳之。御間の内へ御出被成、御戴き御次へ御退候。御老中列座、御用番

本多中務大輔、正四位下少將に被任候由被仰渡。御前主名の儀は可爲隨之通旨、廿六日に出来、奉稱は佐渡守候。御献上物は御前に飾之、御太刀折紙御奏者

番披露有之、松平佐渡守御馬一匹と被唱候。最初御前へ御出の時、は又左衛門と被唱候。

御官位の御禮被仰上直に御着座、御前へ御三方、佐州君へ御八寸御引渡据之、御銚子提子御茶一獻被召上之。其土器御

銚子の口かけ御酌中座、佐州君御進み御頂戴一獻被召上、御看御直に被進、御上段へ御進み御頂戴、御退き一獻、御加への時上意有之。其時御前に有之候御裝刀御前其長、代金三十枚。中務

大輔殿被傳之、御次へ御退座、御短刀御撤し、御刀被帶御出御禮有之、直に御復座、又一獻被加、土器を御手に被持御次へ御退座、御刀を被撤、御短刀を被帶御出。此時御奏者番御献上の御刀披露之、直に御復座御引渡、以下段々引之、御居成に御禮被仰上御退座。次に中將様御献上物、御前に飾之、御禮被仰上御退座。又御父子様一度に御出御禮、直に御着座有之、上意有之、其度々御用番御挨拶被申上候。大納言様にも御列座被遊候事。

一、右御作法書、御老中方より被遊候にも、御加は一度と有之候處、其期に至り御加二度に成。依之御捌きも違申所有之。誠に俄成御習禮に付、如何可有御座やと、御前にも無御心許思召候處、只一篇にて能く御覺被遊候。御老中方御三人共に御出、御習禮も御覽。是は外の御家御元服の節、一向無之事に候由。御進退等無殘所御容儀に付、御老中方始め何れも御感稱不大形、御目付の内大岡右近・松前主馬など申人々は、感涙を被催候由。

一、因幡御前逝去の事

因幡御前様、六月廿八日夜御逝去の事。敬經様御事此間少々御滯

り御浮も有之御不食に付、六七日前より佐々伯順調薬被召上、爲指御沙汰も無之候處、廿七日朝俄に御塞り、御附物頭鈴木清太夫より言上、早打御使者本郷御邸へ參候。九時前相模守様より早打を以て御大切の趣被仰遣、御前にも俄に被成御座、暮過御歸館に候。廿七日より長尾文哲御藥にて、少々御開き候旨。廿八日七時過、重て相模守様より早打を以て、御大切至極の旨被仰進。先づ前田圖書早打を以て被遣、次に玉井市正も被遣、御前にも急に可被成御座候處、又早打を以て最早御事切れさせられ候旨被仰遣、御出は止申候由。

實は廿七日戌刻御逝去被遊候處、相模守様鈴木清太夫を被爲召、加賀守殿御父子共、明廿八日大切成御公用有之候事に候へば、清太夫儀心得可有之事と被仰聞候。仍之廿八日夜御逝去と、御披露有之よしに相聞え候。